

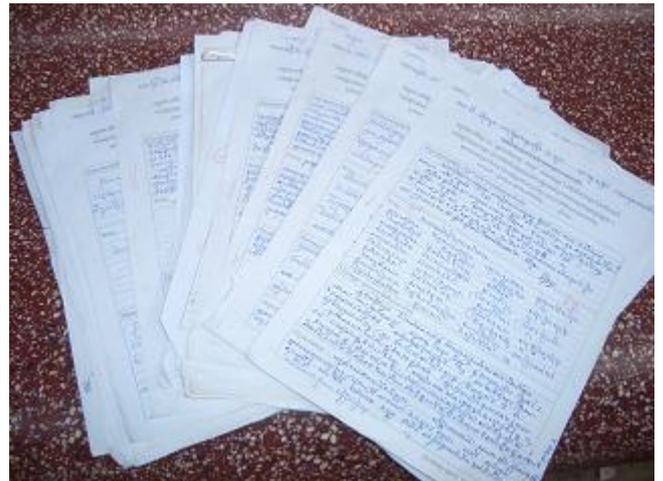
6月の放送開始に向け、3月から準備を開始した。

詩・手紙記入シート

番組のコンテンツの柱ともいえる詩・手紙朗読のコーナー。朗読される詩や手紙は全て統一された記入フォーマットに綴られたものである。まずは真っ白な記入用紙を配布する作業から始めた。障害者が多く生活している各種NGOの施設へ足を運び、障害者1人1人に番組の意図を伝えながら配布していった。また、施設以外にも村で生活する障害者にも手渡していった。カンボジアには字の読み書きができない方も多々いる。そういった方々にも配布していった。彼らは字の書ける友人や家族に筆を執ってもらい、自分の思いを言葉にして伝えてシートを埋めた。大切なのは「思いを伝えたい!」という気持ちなのである。そんな強い気持ちの込められたシートは約1ヵ月後に次々に回収された。



HANDICAP INTERNATIONALにてシートを受け取る



それぞれの思いが切実に綴られたシート

インタビュー

インタビューのコーナーでは地雷被害者や各種障害者支援NGOにインタビューし、録音したものを再生する。放送開始を前に、障害者の方々およそ20人、NGO6団体にインタビューを行い、録音した。地雷被害者には事故にあった状況やその後の生活、今頑張っていること、他の障害者へのメッセージ等を回答してもらった。また、NGOにおいて



はどのような形で障害者



を支援しているかを回答してもらった。

両足を! NGO CVDの責任者にインタビューする様子

広報用ポスター作成（モデルの撮影）

「障害なんてへっちゃらだ。」をコンセプトにポスターのデザインにとりかかった。逆境にめげずに頑張っている障害者があることを、精神的に苦しんでいる障害者や障害の無い人々に分かってもらいたい、そう思ったからだ。2ヶ月に及ぶデザイン検討の末、5人の障害者の方に協力していただいた。撮影では、ラジオ番組のポスターだと一目見て分かるようにラジオを手を持っていた。皆、美しい笑顔である。以下、モデルの方々の詳細を掲載する。



ピッチ・ブンヘイン君（13歳）

2005年10月、牛飼いをしているときに田んぼで見つけた不発弾で遊んでいて爆発。左手首から先が吹き飛ばされ、右手と右足の指の一部を失った。

※ブンヘイン君に関しては現地報告⑤にて詳細を確認できます。



チャム・マエンさん（37歳）

1987年当時、兵士として働いているときに地雷を踏み、左足を失った。妻と5人の子どもを養うために、同じく地雷により視力を失った友人とともに楽器を演奏して歩き、喜捨を乞いながら生計を立てている。



ソム・ソピィさん（26歳）

2005年3月、屋台でサトウキビジュースを売る商売をしているときに、サトウキビを搾る機械に左手を巻き込まれた。小さい子どもが2人いる。地雷被害者以外の障害者にも番組を聴いてもらいたいという思いから、地雷被害者ではない彼女にもモデルをお願いした。



コット・クアンさん（43歳）

1990年兵士であった彼は平原を歩いているときに地雷を踏み、左足を吹き飛ばされた。家族は妻と子ども4人。現在はCVDというNGOで障害者に電化製品やバイクの修理を教えている。番組の地雷被害者インタビューにも協力していただいた。



ヒン・イアンさん（41歳）

1988年、軍にいたときに地雷を踏み、左足を失った。現在は農業をして生計を立てている。子どもは7人。今年の4月に一緒に住んでいた兄と甥を対戦車地雷で失ったばかり。

広報用ポスター作成（デザイン・印刷）

ポスターのデザインは、昨年、一昨年に引き続き、CMC 現地事務所の近くに位置するバタンバン州職業訓練センターに協力していただくことになり、同センターに派遣されている JICA 青年海外協力隊のデザイン職の隊員に最終の仕上げをしていただいた。

A3のポスターを4000枚、A4のチラシを6000枚印刷したが、特にA3のポスターに関しては、プノンペンの JAPAN PRINTING HOUSE 様が格安で印刷を引き受けてくださった。このように「VOICE OF HEART」は様々な方々の協力のもとで成り立っている。心から感謝申し上げたい。



BATTAMBANG PROVINCIAL TRAINING CENTER



印刷に協力して下さった JAPAN PRINTING HOUSE の田中社長と。



出来上がったチラシを確認するスタッフ。

広報活動

番組放送開始を前に、人が集まりそうな食堂や病院、学校関係を次々に訪問し、番組のポスターを貼っていった。



公立の学校にポスターを貼るにあたり、可聴域のバタンバン州、バンテアイミエンチャイ州、パイリン特別市の各州の教育省に出向き、許可証を交付していただいた。

左の写真はバンテアイミエンチャイの教育省を訪問した際の写真。「VOICE OF HEART」の歴代ポスターが壁に貼られている。

多忙な教育省に広報を頼んでも、きちんと各学校に貼ってくれる保証は無いので、手間も時間もかかるが、1枚1枚自らの手で貼っていった。

教室にポスターを貼った途端に次々に子どもたちが集まってきて、「何でこの子は手が無いの？」と先生に質問する。先生は「それはね・・・。」と語り始める。ここに、教室にポスターを貼る意義があるのだ。つまり、番組のポスターは広報ポスターであると同時に地雷回避教育の教材にもなっているということだ。



左の写真の先生は、我々がポスターを貼ったあと、下校時刻であるにもかかわらず地雷の問題について熱心に生徒に語り始めた。この学校の位置する地区周辺には地雷被害者はいない。したがって子どもたちが地雷の問題について考える機会ほとんどない。都市ではどこもそのような感じである。そんな子どもたちにも地雷の問題を考えてもらうことができれば、将来の新たな地雷被害者が減少するだけでなく、地雷被害者やその他障害者への差別が無くなっていくと考えられる。